



福  
卷  
源  
等

二編

四

隨  
六  
九

15  
348  
9



門 48  
 號 348  
 卷 9



挿菴漫筆二編四目録

鯨	要	八十一	蜃	氣	樓	八十一
嘸草跋	全	八十二	秀	句	八十三	
凡牙齶角	全	八十四	恩地左近	八十五		
合	羽	全	源内狸	八十七		
大右硯	全	八十八	夜の檮	八十九		
田毎月	九十一		伍り張	九十二		
ヅガラス	九十二		破	九十三		
景天州	九十四		雷	九十五		

明治三十一年十一月五日

坪内旅藏氏寄贈





杜鵑花大本 九十六  
 紀清次 九十八  
 平油單 百  
 二絶の書 百二  
 爺步栗 百四  
 サゴへイ 百六

高野萬年抄 九十七  
 一向宗肩衣 九十九  
 天糞 絲 百一  
 萬病一毒水 百三  
 田鼠 鷄 百五  
 藁 籍 百七

天藏

摺 養後草二編

田仲



扇の要はとれ号をて象牙鹿角塗要浪湯要或尋た  
 のとのなる本要なりし友要らうととや不用の物とらうて控  
 物に本要も角要もつばもも申の洞の管を今仕はさ  
 左藤物とのえとも人工を費とともるしにえ又の洞糸脚折  
 馬場六角を西八節湯とらるる府折今の糸と糸と工風仕  
 出初て制せりなり令都鄙の王幸らう自他益をばるとらう  
 其頃松原富小路と千栄要と号け小西氏のとらふと

得しと云うは小西氏又雅の今と萬物大智玉藤集といふ家  
 書と著作せられしが予う 十筆未達のますこと何とあるこれや  
 不覚板朽なりはれど迂をの書や書しおしむ小西氏 予う 幼  
 着のどれを知るる事と長幼師徒の差ひと依りてある事  
 お不えは明和の初は物敷せしもの

① 老齡の息とん吹とれり城市山林の形とまを是と清土り登  
 氣樓と云坐土又乾園望城と云本朝よみて稀なるこの振と云  
 なむとも能登越中此沖の毎事らうと云や 予う 知る由本某とい  
 える男越中の依本浦に浴するはつと依りしよと云えんを

形をいふは形容にまこと述はば唯を方のもてさへ  
 是別道とも能加越の中州なると云海濱の佐抗松原と  
 いさうむ廿六夜の三尊と稱するとも人々をさるごとくそのる  
 人のなをて城市とも樓閣ともいゆる其人のるる知つよまう  
 儘よそれとにる形はく勿端雲の歩のどく鏡懸て往來  
 くるあつとまのりやうと云例の佛持子の方便清土のよ鼻  
 少奮氣樓とも乾園望城ともいふるへく赤貝とて本海を  
 尾懸るといふるごとく清土の人を稱する異名と稱するを  
 によつて感とさるる

⑤ 他階の委まきとまひ草の跋の鳥丸亜相光廣卿のむし  
なり其のの骨髄をこみだす 奥書の追かたはく只行とまひ  
かろくけり易きものなり今の序跋のどれぬまらかたなるの  
たゞん今の亜相の序跋とまてとて知る人稀なり

⑥ 秀白の私方の骨まうと昔よりうらまへば指とてとま  
まらうにいかまくと極まらうとまらまらまらうとまらに他階  
の流り俵のまらまらと其格まらうと極まらうの直りまらまら  
南風まらまら私方の上の白れどに跋もともとまら其他階の  
向上の一路まらまら茶比まら茶天より高くと他階低まら

金海比油

⑦ 禽獸魚虫は凡牙は角角に似て類ひと害ひ物と傷むる  
人よ於て陰刀刃戟まらとまらまらも合意まらまら天受の物まら  
他を備り後まらまら人の陰刀刃戟まら具まら備るまらまら  
それ婦女まら有てまらね務まらまら煙の奴敷まら心固と傾る家と破り  
まらまら於てまら巧まら令まら強陥面使まら主心を傷まら内俵と倒  
人の陰毒まら油まら凡牙は角角の形を破るまら智巧敷まら形まら  
孫小仁まらまら笑源

⑧ 楠公に於て恩地尤近の初泉加に浪たりしが楠公能く其

人を知らずと抱んとて使をきりて遠路へたれ其使は對して  
 尤迎いえりし妻たるものと商量して互を合はらんとし其使の  
 士これを待内に對し其妻たるものと傷不覺の侍りし時其妻  
 て彼使の士はまこといよく仕ならんと思ふされしとたう  
 使も奉まきて歸り須かひ捕公後の士は曰ふを恩地がゆめい  
 有るやと尋むむいし使の士有極に苦く列席の諸士と交さ  
 と思ひて捕公の賢慮を家と公能るや尤も有き  
 事なるとの思ひしとやま友近の事れは君有て己の事と  
 知らぬ命を君に致さずと知りて名利を己の命とす事と

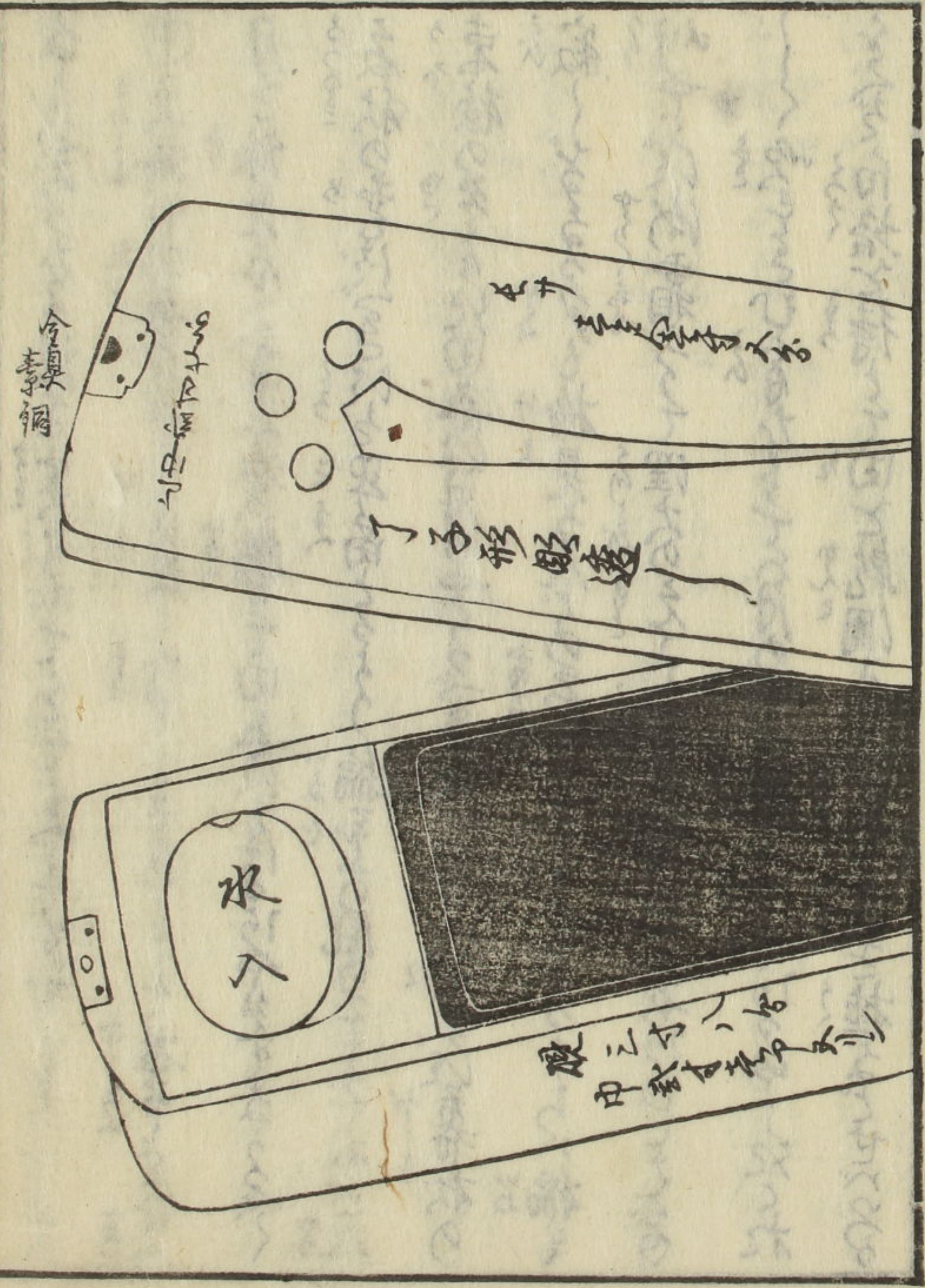
知らぬ命を君に致さずと知りて名利を己の命とす事と  
 知るは出せばあつしと命を君にまよふとせんて其悟と物と  
 此世を色く其妻女の生涯の別と告ぐと色くはや是も本朝乃  
 士の萬人を人なく其の風をうてたまふべきれが使の一云  
 の下に此後せしれに諸君孔明が之顧を待し存らるやくの  
 んとて本朝の國風も其の偶成思ひしとてさるべきを  
 紙にて制せし雨衣と合羽と云はば亦杜瓦樂園の仕振り  
 カノハと云ひのらう本朝の扱折のごくこのカノハの轉信らば  
 とつて十里合羽す茶合羽といふるものも似る類はれ  
 はいや

⑤ 野狐百里に満る如くそ穴居せどとや佐波の風は狐の  
 居るこそ雷く人の知る處なり物に奇怪なる相の首領有  
 て氏依こそ次原内程と云教士の大石りしてこれこそ精を  
 滝へ古函梅谷を縁もよる人よ若く大は駿有る愚民欲る  
 て有と死を右の大石よ向ひ欲とる事と祈るにをさる有  
 ととや一寺更するは國川原田と云姫の眼科某及相川と云  
 府の高賈よゆりり

⑥ 春日社の神寶の中よ上古の硯箱あり移南今宮の神主  
 津に氏其形を撰して而持せし依按ざるは光廣御(神生)

得清(せん)なる所方とて所調なるんをそ意ありてとるは生  
 涯(かい)右よとるせ終る所硯箱人の送り扇箱を用ひむじ  
 とる人取り傳ゆることも春日の所神寶なる上古の硯箱と  
 はて自らとれを御も思ふとるくをとりてとるやねのを傳る

⑦ 三井寺のおるの橋とらふるは本(ほん)のまよはる(まよ)のつらうに  
 たるが月又映しとい後(あと)もある橋花とらるんをんととる者お  
 らるものとともも雷(かみかみ)も伝(つた)へにまかうらび三井寺のけし月と橋  
 とるまを初く月をそんでくのある橋とらふとをそせせけるる  
 べつと骨に橋花輝漫とてとるが初に相の本とそせ



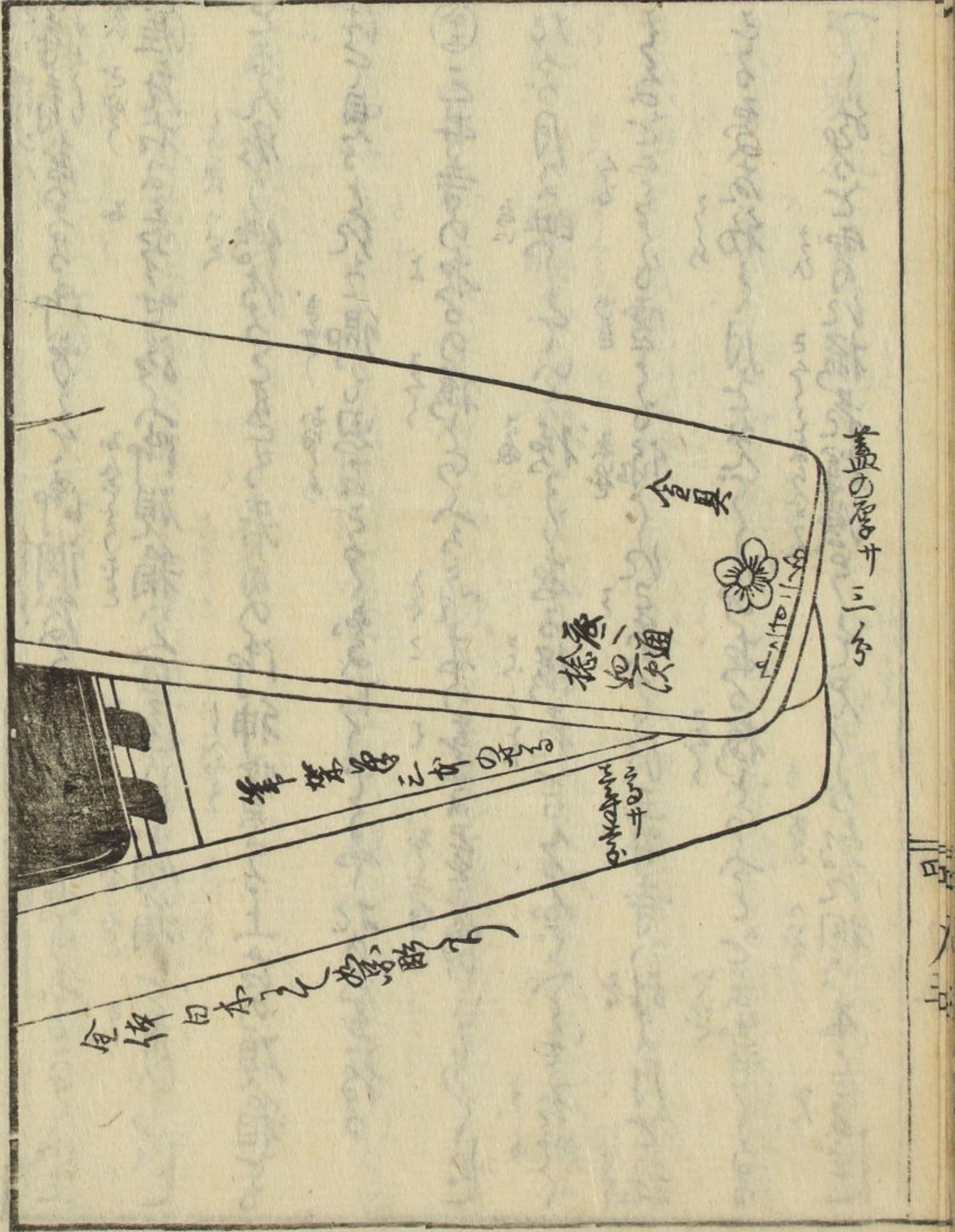
全  
體  
圖

水  
箱  
部

水  
箱  
部

透  
眼  
形  
子

水  
箱  
部  
の  
中  
心  
部  
分



水  
箱  
部  
の  
中  
心  
部  
分

水

水

水

水

水

水



まことおろつたる況を寔とくしてそとをせよと

(平) 木科や田毎の月を凍く冷やしてのこを推きおれ

月を凍えんとおひ春の終りて田毎にたるとやれもさうく

る秋のそはほこいそ早南とるうろ稲の風のそよくやご八

束極のそらに田毎の月の中らるごさあてんかぶる春秋の

寂くさるるたも検見さんどのこてさるらるうらうら稲も

刈中だ漸霜ううて埋火のそま異らぶうとるおりらしとるも

く吹まごこむさなうてわりのうはもるほもりぬぐれこれ

とる白塔と待とて田と乾涸を油菜まを植まごせびり

田毎の月を凍えんや漸跡もる濕田のそ毛に等しん年はこ  
そをそおの月をちあらえとおひごらむもよたやうと書れまぶ  
免びるく後空しく酒をから一かまぬぞやうとと  
おもふや

(五) 掛物の襷紐を遊らうらに仮張まうけとて數十回ぐるん

目も暗と行まの甚ううく免角表庄のとやく生まをんを成

飲とるる良工の制せし表具も子合とるから成況や地よ

の造じしものや

(五) 墨人後といふものには伝加うう物月の薫らうすのそまら

せうこんを天學家に用ふる日とるるゾテガウスに割るるめく  
 よく本船の礮石及百般の色相ける御財とてわたり出せら  
 應喬とるる象刻家諸國の礮石を自らして所持せしめ  
 百餘種に及り了抄板の貨賣止田といふ所のこれらとて和唐  
 の礮石は出せし見しに割るる通るるほどに賢くともや其  
 礮石の石力をよくとらて工風一二年一介はりうの礮石を  
 吸いぬると今年五十斤吸能の石力を付たり是とてゆはれ其  
 工風せし初め清土の現より船洗の有るを洗ばらうとるる  
 實をあらとれて石を賣り入るともようふりし付てする礮石と



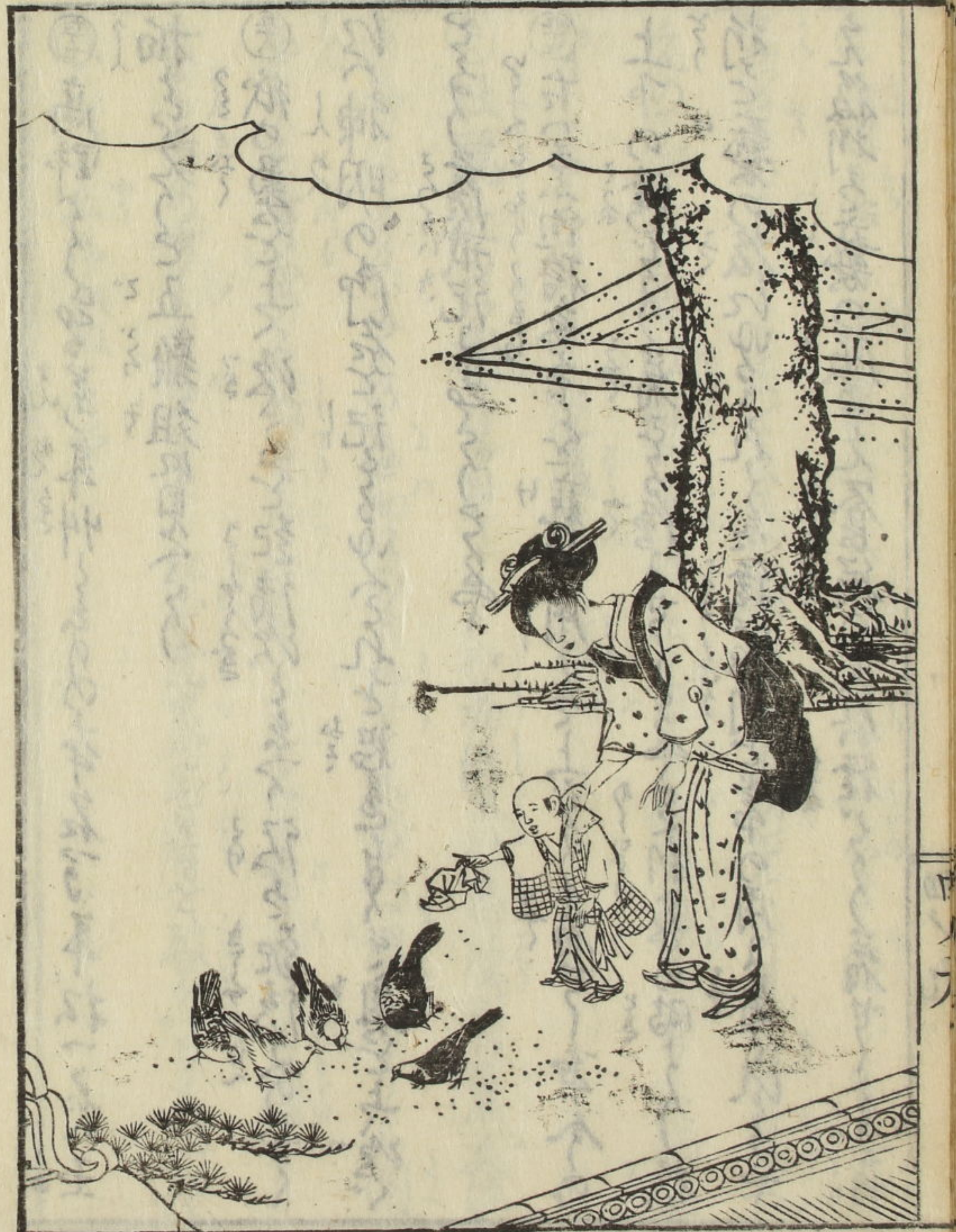
河をそびえ清くはきこ五日さくく吸能の厚み人のく死  
 ぬくはる今日後と一介にらるる四五日の内より雨をかりし  
 十日は月もましくはき雨も加倍とれを終より初めはるる  
 陸よりるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる  
 破風を男女十六才をさすやもとれど婦女も初めはるる  
 に渡るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる  
 廣は市の拒絶百弾にまはらるるるるるるるるるるるるるる  
 景天皇と侍極しるるるの上より皇太子の強を避くともなり  
 一々名救大州ともむ用の言文そ練りたり傍らりなり



⑤ 雷の落るるをたれも身軀をくまうて流すもむら  
 ちる月のとやとまをたるお翁奥の生肉とまうけて跡を流す  
 えのどくともや江湖の邊の生官が下僕と扱ひ見りに相違  
 なくといえり一年に後登壇は備へ

⑥ 杜鵬苑の巨樹をり見しを和加降下致番降村の震ま原  
 を昂といえるおこの庭加にわりの徑をまみ人一塊ともうて園  
 ありて皆あり樹を田うくしてまみま布衣の巨樹をり  
 武蔵貫の方よりたるとまに土屋家宅等と破布とこれのそ  
 によめて止給ひぬともや

⑦ 高野よりあるま年州とまの奉名り奉ね一志の玉  
 拍とえりと五難俎に見へり  
 ⑧ 紙の巻と上と次とを記清次とまうけら記清次のおく  
 け神明の奉名を記するゆにこれを思まもりて奥と上と次と  
 ともり後戒記よまるとともや  
 ⑨ 古い糸袍将衣まを藝装の用とま上とま下と着せし事今の  
 上下の袴まうり着るとま下とま上とま下と着せし事今の  
 折と藝の後にゆきこれに後腹折と帯の用と着と候ともや  
 え後折と藝の服ゆえ食膳のとれに袴とまうり着せし事今の





けいこん八の真意を廣澤先生とやうに達者なるを予はたれが先生  
 かよ叶はれ場西にされし後、日られかど居るぬがよとや  
 り、病の百とそとてつうに先生共ととゆと此處小便を用  
 とつ物と書きしを、れかよ余りさかかぬ事とゆひ  
 有候とて、九節をさうらふ、其後背其角ありしを、忘八の  
 噂とせし、其角を放ごころのや、おんををさるるべし  
 其後、深きとんと、其下へ花の庵と名しと、人直授と云ひ  
 の、煮つとまの、今二役の雅品とまの、一とや  
 徳房と忘八と云いんを、一と考、傍忠信、礼義、廉、耻の八つ

とまをて、松平の流儀を忘八と清土のさう  
 病を丙なり、虚火、寒火、邪火、の邪火なり、此の万病一毒  
 氷とて、後とらるる病の字、此と云ふ、及とて、今曲なる  
 と、接して、此は、よろるととて、一以貫の例、一則と云  
 万病一乳の、酒、湯、或は、儒醫一本と云へ、身之義、此にあら  
 たり、丙は、水を、餘り、けり、けり、又病、を、さう、病、正さる、及  
 平念、たるを、正は、復る、理、を、本、復、候、復、ま、と、云、後、味、味、輕  
 重、よ、か、ぎ、り、病、の、後、を、さ、ら、う、候、に、病、家、へ、行、ん、も、さ、く  
 見え、る、と、れ、膏、よ、貯、せ、病、室、の、名、今、朝、温、盤、門、は、入







